たとえ、全てに否定されようとも～外伝～

Laziness

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【たとえ、全てに否定されようとも】の外伝です。

杏さんの奮闘だったり・・

天城さんの苦労だったり・・

本編では書かなかったことを、ここに書きます。

初見の方は、先に本編を読むことをお勧めします。

目　次

そして、支部長になる ―――――――――――――――― 1

そして、支部長になる

「いきましょう、アン・アリミ。」
私は、男の子に手をつかまれ、新たな世界へと踏み出した・・・

私は有里美家を抜け出し、【ＷＮ×ＷＲ日本支部】というところに連れて行かれた。
「この大きさで・・支部？」
「そうですね。この組織の規模は計り知れないので、早めに慣れるのが良いかと。」
ＷＮ×ＷＲは、各国に支部を置いていると聞いたことがある。
「ほらほら！遠慮しないで中に入って！」
「え？え!?」
私は促されるがままに、その形容できないほどの大きさの支部に入った。

中に入ってみると、なんとも清潔。
「わぁ・・」
「アン・アリミ、こちらです。応接室に案内します。」
「じゃあ、僕は必要な書類を持っていく。知りたいことは彼に質問してくれたらいいよ。」
元帥さんはどこかへ行ってしまい、男の子と２人で取り残された。
「では、いきましょうか。質問は歩きながらどうぞ。」
「う、うん。じゃあさ・・」
質問を許可されたので、質問させて貰おう。
「私って・・何の職につくの・・？」
彼は悩むような仕草も見せず、こう言い切った。
「支部長ですね。」
「いや・・そう言われても・・。」
支部長がどれ程の重役なのか、私には想像がつかない。

まあ・・言っちゃ悪いけど・・支部長って階級低そう・・かなぁ？
「説明足らずでしたね。まず、ＷＮ×ＷＲの構成から説明させていただきます。この組織は、まず大きく【内務】と【外務】に分けられます。内務は一旦置いて・・アン・アリミが属する、【外務】について説明します。外務は、その名の通り実際に戦場に赴いたりなど、本部から離れて活動する任務を受け持ちます。実動体（通称Ｗ・Ｗ）潜入捜査団（通常Ｓ・Ｗ）など沢山の部隊がありますが、支部長はそのどれにも属しません。支部長は『特別執行部』という役職となります。一般的に呼ばれることは滅多に無いですが。」
「『特別執行部』・・？凄いの・・？」
危惧していたことが訪れたかもしれない。
救って貰ったのは嬉しいけど・・もし重要な役職だったら・・？
「そうですね。全ての部の、頂点に位置しているといってよいでしょう。」
な・・!?
ちょ、頂点!!
いままで、最早その辺りの泥レベルで扱われてきた私が・・!!
「な!?そ・・そんな!!」
「特別執行部には他にも、捜査主任や現場指揮主任、はたまた戦場医師主任など、さまざまな主任や重役が集まっています。いわば、リーダーの集まりです。」

想像以上だった。凄いのかな～程度だったのが、最早今すぐ辞退したい気分だ。
まあ、与えられた以上はしっかりやってみたいけど。
「それしか・・ないの・・？」
「元帥の気が変わらなければ。ですが誇ってよいのですよ、貴方にはそれほどの才能があったということです。」
私に・・才能・・？
今まで、ろくに戦うこともさせてもらえなかったこの私に・・？
「待って・・私に才能なんて・・！」

「貴方が自覚していなくとも、元帥が貴方の才能、そして強さを感じ取ったのです。今まで戦わせてもらえなかったのなら、これから階級に驕らず鍛えれば良い。貴方のその強さ、私もこの身で感じましたから。」
世界最強・・とか言ってたっけか。
こんな子供の言葉が、今の私には凄く心に響いたようで。

「うん・・じゃあ、がんばって・・・みる。」
「ええ、少しずつ。人間、日々精進していくものです。」
何だろう、この子はもう悟りでも開いているんだろうか？
「君の・・役職は・・・？」
「【外務総統】ですね。先程、【外務】と【内務】に分かれていると説明しましたよね。それの【外務】の方の、リーダー的立場にいるものです。」

・・は？

いやいや、まさか。
疑うのも悪いんだろうけど、あのＷＮ×ＷＲの半分以上を担ってるってことだよ・・ね？
私がいままで男の子・・とか言ってたこの御方・・・まさかの超重役。

「あ、特に遜ったりしなくても良いですよ？今までどおりで。」
「いえ・・そういうわけにも・・。」
そう言われても、階級を伝えられてしまっては、どうにもこうにも・・といった感じだ。
「困惑の表情ですか・・。ではもう、お好きにどうぞ。」
（あ、諦めた。）
「わかり・・ました。外務総統・・？」

その呼び方に、彼は若干顔をしかめた。
「できれば、階級で呼ぶのは止めて頂ければ・・・。」
「で・・でも・・・。」
彼は、諦めきった顔をし・・
「まあ、現日本支部長を見れば分かるか・・。では、少し寄り道しましょう。」
本来行くべきルートを変えて、彼が向かったのは【支部長室】
どうにも、入るのに勇気がいる扉である。
「失礼します。ジョシュア様、いらっしゃいますか？」
『お、その声は。入っていいぞ！』
ノックの後、随分陽気な声が響いてきた。
「失礼します。」
「し・・しつれい、します」
私は、たじろぎながら部屋に入っていった。
「おや、ディザ殿。この子はなんだい・・っと、すまんすまん野暮なことを聞いたな。」
「いったい・・何を勘違いしているんですか？」
彼女は、口元を手で覆いながら、申し訳なさそうな顔をした。
野暮・・なんでだろ。
「勘違い？なんだ、日本に来ていきなり彼女の1人でも作ったのかと」
「貴女とは違いますからね。」
「はっは！その通ｒ・・じゃねぇ!!生まれてこの方、はっ！」
男の子が、真面目な顔をしてそういうことを言うものだから、私は頬を染めつつ、ついつい笑いをこぼしてしまった。
「この通りです、アン・アリミ。支部長クラスは堅苦しそうに見えて、こんなのばかりなのです。」
「こんなの・・っちゃあ心外だがねぇ。」
彼女は酔っ払った父上のような顔をしている・・。
仕事中に飲酒とはいかがなものか。
「ですから・・心配しないでください、アン・アリミ」
「うん・・わかった・・ふふ。」

「お、おう・・なにやら解決したようで。」
どうやら彼女曰く、支部長が結局一番仕事が楽らしい。
「じゃあ・・・
天城様♪
とか・・どうかな。」
彼は僅かに頬を赤らめ・・た気がする。
「え、ええ。ではそれで。」
「いいねいいねぇ、青春だねぇ。」
にやけながらこちらを見つめる支部長、最早唯の変態さんだ。
「では・・そう呼ばせてもらいます、天城様・・。」
「め、メイドみたいだな・・」
「ご不満・・ですか・・？」
「ぐはっ！」
なぜか、鼻血を吹いて倒れてしまった。

ジョシュア様が。

「何故貴女が倒れるのです？」
「いや・・その、破壊力ぅですかねぇ？」
何で疑問系なんだろ。
「天城様・・ありがとう、ございます・・。お陰で安心しました・・。」
「いえいえ、では戻りますか。もういきますね、ジョシュア様。」
彼女が、亡霊のように起き上がってきた。
「おう・・またいつでも来いよ。」
彼女はそのまま倒れていってしまった。

「あの人って・・やっぱり強いんですよね・・？」
いつの間にか、完全に敬語になってしまった。
「ええ、あんな成りですがね。」
「私も・・強くならなきゃ。」
彼は、それに対し首を横に振った。
「決して焦る必要はありません。貴女はあなたのペースが一番良いのです。ですから・・これから私と強くなっていきましょう。心身ともに・・ね。」
「・・はい!!」

その後、手続きを済ませ、無事私は【支部長】になったのであった。

それからの苦労は、また別の話・・。